

近代小説の読み方 (1)

幸田露伴 『五重塔』／『運命』／『連環記』……(川村二郎)

志賀直哉 『大津順吉』／『城の崎にて』／『暗夜行路』……(西垣 勤)

谷崎潤一郎 『痴人の愛』／『少将滋幹の母』／『瘋癲老人日記』……(野口武彦)

樋口一葉 『十三夜』／『にごりえ』／『たけくらべ』……(松坂俊夫)

三島由紀夫 『仮面の告白』／『金閣寺』／『豊饒の海』……(饗庭孝男)

森 鷗外 『舞姫』／『雁』／『阿部一族』……(小泉浩二郎)

三好行雄 編

有斐閣新書

近代小説の読み方(1)

三好雄編



有斐閣新書

近代小説の読み方(1)

1979年8月15日 初版第1刷印刷
1979年8月25日 初版第1刷発行©

編 者 三 好 行 雄

発 行 者 江 草 忠 允

発行所 株式 有 斐 閣
会社

〒101 東京都千代田区神田神保町 2-17
電話 (03) 264-1311 振替 東京 6-370
京都支店〔606〕左京区田中門前町 44

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

理想社印刷・和田製本

★定価はカバーに表示してあります

序に代えて

小説を肩肘張って読まねばならぬ固苦しい読書対象とは思っていない読者も多いにちがいない。たとえば隣人とつきあうように、好きな小説の主人公と気楽につきあっておけばそれでよい、という考えかたも確かにありうる。そこに〈読み方〉などを求めるのは、文学の教師だとか研究者だとかに自己限定した人間の思い入れにすぎないというふうな声もすぐ聞こえてきそうである。

しかし、消閑の具として、寝転がって活字を追うだけの気楽な読みかたのなかでさえ、読者は好きな隣人と嫌いな隣人とおのずと選択する。その好きか嫌いかの次元から、ある種の出会いに似た読書体験との距離はじつはさほど遠くないのではないか。わたし自身の経験でいえば——これはすでに別なところで書いたことだが——わたしにとって、おとなの文学との最初の出会いは中学二年の秋、肋膜炎を病んで休学した回復期のつれづれに、父の書棚から引きだした改造社版『現代日本文学全集』の一冊、『芥川龍之介集』がそれであった。小説のおもしろさをはじめて教えられたわけだが、なにがどうおもしろかったのか、いまはもう記憶もあやふやである。ただ、ひとつだけ鮮明なのは『河童』の読後感で、九州に育って河太郎の民譚を聞

き馴れていたせいかもしれないが、架空の小動物に託した痛烈な戯画は、少年の空想癖に適度な刺激を与えて奇妙な感銘をのこした。

もちろん、このときのわたしに確かな出会いの手ごたえがあったわけではないし、まして、『河童』のにがい本質が見えていたはずがない。雌の河童や子どもの河童にからみつかれて、息もたえだえに歩いている雄河童にしても——夫であり父である男のカリカチュアを、首筋にかじりついている子河童のひとりにすぎない中学二年生に理解しろというほうが無理である。所詮は稚い読みかたにすぎぬといってしまうえばそれまでだし、読み手の成長とともに作品の相がおのずと変貌するというのも事実である。読み手に応じてさまざまな貌をもつところに、傑作の傑作たるゆえんがある。

わたしにとっても、芥川龍之介との最初の触れあいは、小説のおもしろさについてのかすかな発見だけを遺して、この作家はわたしのなかを素通りしていった。にもかかわらず、その後自然科学の徒をころざした迂路を経て、文学研究の一端にとりついた人間として、あらためて芥川龍之介をあらたな研究対象として据えなおしたとき、そのわたしなりの芥川理解が少年期の経験とまったく無縁だったとはいいきれないような気がする。どこがどうかかわっているかという、因果の脈絡を的確に辿るのは不可能だが、あるいはいまの読みかたの根幹を決定するような龍之介の貌を、稚い理解を通して無意識に見てしまっていたのではないかとも思う。

現在のわたしが芥川龍之介について抱くイメージ、すくなくともその発端は少年期のささやかな読書体験のなかにあった、という考えかたを否定する根拠はどこにもないのである。過去を現在につなぐ〈無意識の記憶〉^{レミニツサンス}とは、そういうものである。

だから、どうだというわけではないが、小説をどう読むかという問いがつねに、他者の〈生〉とどう出会うかという問いをふくむことだけは確かである。小説はすべての読者にとって、みずからと同時代の、またみずからの生きなかつた時代の状況と生の証言であり、歴史を織りつづけたさまざまな〈風景〉の記録にほかならない。そして、あらゆる傑作はその背後に、書くという行為に賭けた作家の生と死の総体を隠している。

出会いが発見であることはいうまでもないが、それは主体から対象への一方的なかかわりかたではなく、対象から主体への逆照射でもある。比喻としていえば、主体が対象によって発見されることでもある。読者が小説を選ぶように、小説もまた読者を選ぶ。小説を読むという行為における真の出会いとは、作品が自分にだけ語りかける声を確実に聞きとることにほかならない。そのことにかかわって、小説をどう読むかは問われねばならぬ。

もちろん、〈小説の読み方〉に普遍的な公式が期待されない以上、ひとは小説をどう読むべきかについて語ることはできない。かれはただ、自分はどう読むか、どう読んだかについて語

りうるだけである。それはいうまでもなく、自分にだけ見える作品の貌、自分にだけ聞こえる作品の声について、そして、それを見るための、また聞かされたための手続きについて語ることである。そのことによって、作品の感動は真に普遍化され、共有される。——本書もまたそうした意図のもとに、すぐれた文学的個性の語る〈近代小説の読み方〉を提示したのである。

本書では、第(1)巻に幸田露伴・志賀直哉・谷崎潤一郎・樋口一葉・三島由紀夫・森鷗外、第(2)巻に芥川龍之介・泉鏡花・国木田独步・島崎藤村・太宰治・夏目漱石の一二人の作家が収められている。それぞれの作家について、作家活動の画期をなした作品の主題や方法を分析し、そこに彷彿する作家の生の諸相をさぐるなど、具体的な〈読み〉の手続きを通じて、それぞれの作家が遺した文学世界の総体とその現代にかかわる意味を明らかにすることをめざした。

ここに選んだ一二人の作家がいずれも、日本の近代文学を語るときに避けて通れぬ存在であることはいうまでもない。日本の近代文学を代表する作家がこれに尽きるというわけではないが、すくなくとも、近代文学史を貫流するさまざまな傾向は網羅しえたと思う。

明治の青春から現代にいたるまで、日本の近代作家はおのこの時代の〈風景〉のなかで、表現上のさまざまな試行をくりかえしながら多彩な作品を生みだしてきた。それは一言にしていえば、理念としての〈西洋〉と、風土の伝統とわがちがたく結びついた〈日本語〉との格闘

の歴史であった。西洋の文学理論の受容をいそいで〈近代〉ににじりよりつつ、そのあわただしすぎた強制が知識人の内部にめざめさせた反西洋の感覚Ⅱ〈反近代〉との葛藤と分裂の過程といいかえてもよい。その二極を包括してどのような史的体系を完成するか。露伴や鏡花といった作家たちの位置づけをふくめて、それが目下問われている新しい文学史像の内実である。すべては既成の眼鏡から自由な〈読み〉から出発すべきであろう。その意味で、本書では所収作家を通常の文学史の時間に添って整序することをあえて避けた。読者と作家とがまず手ぶらで対面する、そのための文学への道をも意図したからである。

最後に、編者の意図を了とせられ、すぐれた労作を寄せられた執筆者各位に謝意を表する。

昭和五四年七月二十七日

三好 行雄

編者紹介

三 好 行 雄 (みよし ゆきお)

東京大学文学部教授

執筆者紹介 (五十音順)

饗 庭 孝 男 (あえば たかお)

青山学院大学文学部教授・文芸評論家

川 村 二 郎 (かわむら じろう)

東京都立大学人文学部教授・文芸評論家

小 泉 浩 一 郎 (こいずみ こういちろう)

東海大学文学部助教授

西 垣 勤 (にしがき つとむ)

神戸大学教育学部助教授

野 口 武 彦 (のぐち たけひこ)

神戸大学文学部助教授・作家

松 坂 俊 夫 (まつさか としお)

山形女子短期大学教授

凡例

- ① 引用原文のテキストは各執筆者の判断によっています。
- ② 引用原文が歴史的仮名遣いの場合、仮名遣いはもとのまま（ふり仮名も同様です）、漢字は新字体によっています。

本書に収録の写真は日本近代文学館提供。

目次

序に代えて 三好 行雄



1 幸田露伴

川村 二郎
< I >

課題としての近代／露伴と近代／近代の限界と露伴の新しさ

I 露伴と近代 3

II 『五重塔』 9

小説と近代／主人公としての芸術家／孤独と秩序

III 『運命』 19

文体と意味／歴史と文学／道理と運命

IV 『連環記』 29

文語と口語／連関の世界

V 露伴と全体 33

全体の直観／個と全体

2 志賀直哉

西垣 勤

〈37〉

I 三つの作品の位置 39

文学史における位置／志賀直哉の文学の前期と後期／

前期作品群／大正三年からの後期の出発

II 『大津順吉』 49

徹底した「自己」の凝視／

トルストイの『復活』の倫理と旦那意識の葛藤

III 『城の崎にて』 55

前・後期の midpoint としての作品／生と死、その奥にあるもの

IV 『暗夜行路』 61

自然に対峙する自我から融解する自我へ／

性の苦悩から愛の苦悩へ／歴史・社会の不在

V 文体の究明の重要性 73

研究の達成点／文体論的考察の深化

3 谷崎潤一郎

野口 武彦

<79>

I 谷崎文学へのいざない 81

家庭向きの「変態小説」／文学の主題としての「母」／

谷崎文学の時期区分

II 『痴人の愛』 87

ミスター平凡の恋愛体験／「悪女」の誕生／忍従のもたらす至福

III 『少将滋幹の母』 94

母恋いのテーマ／男たちの性の争い／「母」との再会

IV 『瘋癲老人日記』 101

老齡と性愛／夢に現われる「母」／仏足石の幻想

V 谷崎文学とマゾヒズム 108

4 樋口一葉

「母」の影との格闘／谷崎文学の現代性

松坂俊夫

〈115〉

I 一葉文学の基底 117

一葉の志向／一葉と和歌／作風の転換／一葉文学の位置

II 『十三夜』 124

成立の背景／お関という女性／悲劇の意味／複雑な人生

III 『にぎりえ』 130

『にぎりえ』の意味／お力と朝之助／お力の〈思ふ事〉／お力と一葉

IV 『たけくらべ』 137

『たけくらべ』の背景／美登利の位置／作中の子どもたち／

『たけくらべ』の主題／文体の特徴

V 一葉文学の可能性 144

一葉文学の魅力／一葉文学の読直し／一葉文学の批評性／

新しい一葉像

5 三島由紀夫

饗庭 孝男

〈153〉

I 三島由紀夫の表現構造 155

夏と死のイメージ／終末観のイメージ／思想と芸術

II 『仮面の告白』 162

〈気質〉と〈思想〉の劇／生の本質と演劇

III 『金閣寺』 169

美への復讐Ⅱ 行為／美の一回性と人間の生／行為への夢

IV 『豊饒の海』 175

主人公としての時間／瞬間の充実と喪失／輪廻転生の時間／

虚相の世界

V 言葉から集団へ 183

言葉と現実／行為と現実／集団としての言葉／

三島由紀夫の詩と政治

6 森 鷗 外

小泉浩一郎

〈191〉

I 近代の二元的矛盾への凝視 193

『舞姫』と日本的近代／『雁』と近代／鷗外の歴史意識

II 『舞 姫』 198

現実認識の文学／近代的自我のめざめ／否定的自己認識の定着

III 『雁』 206

みごとな四段構成／時間と空間の限定／お玉のめざめと挫折

IV 『阿部一族』 212

文学と歴史／史料と作品／殉死の客観的与件／

対立のヴァリエーションと主題の隠蔽

V 現代と歴史への凝視 219

『舞姫』と「弱性の人」設定の意味／『雁』の青春／

『阿部一族』の方法意識

1 幸田露伴

川村 二郎



幸田露伴（慶応3～昭和22）。『連環記』発表のころ。

『尾花集』（明治25）表紙。露伴25歳の作『五重塔』を収める。

